

# ヨハネ「福音書」における術語πιστεῖνの用法（1）

## Der Gebrauch des Terminus πιστεῖν im Johannes- „Evangelium“（1）

（2001年3月31日受理）

佐々木 寛 治

Kanji Sasaki

Key words：ヨハネ福音書，ピステウオー，視覚言語

### はじめに

ギリシア語動詞 πιστεῖν はふつう「信じる／信用する／信頼する／信を置く／託す／委ねる」等々と和訳される。ヨハネ「福音書」がこの動詞を使用する頻度は新約文書の中で際立って多い。ところが他方で、その名詞形 πίστις の用例はこのテキストには皆無である。この落差の持っている意味は何であろうか。

神／父に「真実」を述語するとき使用される名詞 πίστις も、ヨハネは πιστ- 語群を完全に拭き去り ἀληθ- 語群に統一する (3,33; 7,28; 8,26; 17,3)。おそらく名詞「信仰」の語義排除を明確にするためであろう。

現代のわれわれは「信じる」という言葉を、「信仰」という語彙素なしの圏域で、使用しはしない。現代のわれわれだけでなく、新約聖書の言語世界に照らしてみても、上のような落差はまことに異様な事態であると言わざるをえない (次頁末尾対照表参照)。言語使用のこのような偏りが告げていることは何であろうか。

少なくともまず言えることはこうだろう。原始キリスト教運動の中であってヨハネ共同体は、πιστεῖν という動詞が表意する人間の (広義の) 行為をめぐる、何か特別な理解を主張しているはずである、と。

その上でわれわれは推察する。彼らは「信仰」と名詞化される時の危険、むしろ「信仰」という名詞化を許容してしまう傾向にある「信じる」営為理解の危険、これに鋭く注目しているのであろう、と。

「永遠の生命を持つ」、「光を持つ」とはヨハネ共同体の語法である。ところが彼らは、「πίστις を持つ」という語法を生み出しかねないコンテキストを慎重に回避している。彼らは πιστεῖν という行為を名詞へと「抽象」すること、「抽象」された「概念」を客観的対象として主観に対峙させること、近代的自我において肥大化することになるこのような反省的操作を明確に拒否している。そのような操作は彼らの理解する πιστεῖν という行為そのものに背馳するのであると彼らは考えているかの如くである。

πιστεῖν という行為に関連し、彼らは名詞化一般を拒否しているわけではない。ヨハネ「福音書」に著しい術語に、(典型的には) 一人称イエスが呈示する、定冠詞つき現在分詞 ὁ πιστεύων 「der Glaubende 信じている人」というものがある。ここでは πιστεῖν という営為は当の主体本人によって反省されているのでもないし、彼の外へと「抽象」されてもいない。その主体の中でこの営為が息づき、これによって主体が

明るむことを語るのは、イエスその人であって、当の主体ではない（語り手が提示する ὁ πιστεύων についても、主体は必ずイエスとの関連の内へと導入される）。

ヨハネ共同体が名詞 πιστός を使用しない、ということとおそらく裏腹な関係にあるのは、彼らは「神に信じる」という文をごくわずかしき使用せず、しかもその例外的な場面でも、「神」単独ではなく必ず「イエス」と結合した形でしか使用しない、という事実であろう（後述）。彼らの理解する πιστεύω は、必ず「イエスに信じる」のであり、それがとりもなおさず「神に／父に／イエスを派遣した方に信じる」ことである、とされる。自らの神学が「二神並立ではない」という結論に至るまでには、ヨハネ共同体に生死を賭した激震が続いたのは間違いない。むしろわれわれは、ヨハネ共同体は創出期キリスト教運動を「二神並立の神冒涇」として圧殺するべく積極的に動いた、消しえない過去をもつユダヤ人信徒たちであると考えている（彼らにはこの過去は、自らのなす神殺害が引き寄せた神無き夜、と総括されたはずである。この夜の時代に根差す共同体の記憶が、テキスト中に反復強調される術語ゼーティン [求める、捜す] に反響しているのを、われわれは聞くことができる）。

彼らの現在終末論は、自ら招いたこの神無き夜のただ中で聞こえた「声」によって事後的に、＜終末は既に開始していたのであった＞として知らしめられた結果であり、他ならぬ彼ら自身の神学の根本的転倒の所産である（われわれは「しるしを見る」ということの転倒の次第を最後に集中して目撃することになるだろう）。こうしてこの終末論は、πιστεύω が成立するならばそれは必ず「イエスに信じる」ことに純粹に徹底化されなければならない、とするラディカリズムである。そうであるとすれば彼らは、自らが迫害する当の運動体の原理を純化極限化したところに真理を認め、逆にこれに服するに至った、といえよう。彼らには、自らの共同体に沈殿する πίστις というカテゴリー（＝当該用語使用の生活連関）の古層を埋葬し尽くすことが必要だったのだろう。

強烈に信じるが故に逆に神の子・イエスに躓き、信じる場そのものを喪失させられ、神無き夜の中でやがて人の子・イエスによって「信じている者」とされて光に明るむことを得るに至った共同体。われわれはこのような彼らの「信じる」ことの証の言葉を、「信じる」という動詞を中核とする諸動詞の用法という範囲内で、考察しようとしているのである。このような動詞群が喚起する意味内容が重層し錯綜しており、それを整序して理解するには、自らにおいて失うものも多いことは覚悟しなければならない。

われわれがここまで述べ来たった予感めき独断めいて曖昧に聞こえる言説はすべて度外視されてよい。ただ本小論読者にこの場でまずわれわれが要請することは、「聞く、見る、受け取る、知る、信じる」という語彙素、そしてさらに「言葉、声、しるし、真理」という語彙素についての既成概念は、挙げてこれをひとまず括弧に入れていただきたい、という一事に尽きるのである。

	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハ	言行録	ロマ	Iコリ	IIコリ	ガラ	フィリ	テサ	フィレ	Iヨハ	IIヨハ	IIIヨハ
πιστεύω	11	14	9	98	37	21	9	2	4	1	5	0	9	0	0
πίστις	8	5	11	0	15	40	7	7	22	5	8	2	1	0	0
πιστευέω	1	0	1	33	11	2	1	1	1	0	0	0	6	0	4
πιστευία	0	3	1	14	1	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0

術語 πιστεύω 出現頻度	全98例	
A イエスに信じる	61	A-4 1人称イエスに信じる (17)
A-1 尊称・別称におけるイエスに信じる (11)		A-5 イエスの～するのを信じる (13)
A-2 イエスの言葉、名、業に信じる (5)		B 客体非明示 30
A-3 非1人称イエスに信じる (15)		C 神に信じる 2 (+A-4と重複) 1
		D その他 5

## 第1章 方法上の若干の留意点

### 1.1 辞書・百科辞書の解体、形式言語学・形式意味論からの決別

#### 1.1.1 語彙の記号内容の多重性を、言語使用の生活空間の中で考察する方法の開拓

語用論を「言語表現とそれを用いる人たちとの関係の研究」と定義するとき、このような「研究」は言語学の世界では「(科学的形式性探求のために)都合の悪いデータを捨てる屑籠として」取り扱われてきた、と1980年にG・N・リーチは述懐している(『意味論と語用論の現在』理想社)。語用論と認知言語学は語彙を言語使用の生活空間のなかに取り戻し、客観主義的真理論を突破してこれを主観化することに努めてきた。1990年代に入り認知言語学は急速な発展を見せ、形式意味論と認知意味論とは相拮抗するに至り、やがて両者のイデオロギー対立ということが語られるようになった。そのような段階となつてからすでに久しい。ところで聖書学方法論の大規模な転換は言語学そのものにおける形式的科学主義の帝国(クリステヴァ)の輝きの喪失と平行して、言語学と聖書学は同じ時代の波に襲われている。

われわれがヨハネ「福音書」が内包するテキスト重層性を解明するためにU・エーコの諸著作から多くの示唆を得たのは1999年日本新約聖書学会第39回大会口頭発表の準備過程においてであった。エーコの記号論、テキスト論は依然として形式的意味論に繋がっていて、辞書からの解放を求めてなお百科辞書へ向かったに留まっている。ヨハネ「福音書」における術語 *πινετω* の用法分析にとりかかるにあたって、われわれはなぜ「辞書・百科辞書の解体」ということを語るのかという点について述べておきたい。ここでは、エーコの業績のどのような側面を認知言語学のどこへつなげようとしてわれわれが試みているかのその一端を、現在必要な限りで、述べることにする。

#### 1.1.2 結束性 *cohesion*、整合性(首尾一貫性) *coherence*、シナリオ *scenario*、トピック *topic*

テキストの重層性を分析するために、まず<テキスト>側のまとまりについて基本的な術語の確定が必要である。その<テキスト>側のまとまりに、読者側の読みによる、読者の先入観、常識、視点というものがどう入り込むのかのその現場検証を少しずつ始めよう。以下の議論はエーコの論じ方をなぞりつつ、それをわれわれにとって必要な方向へと発展させていく、という方法で進めていくことにする。

次の二つのディスコースを比較されたい。

- (1) a 健一は自分の犬の首輪を赤い革のものにした、哲也もそうした。  
b 健一は自分の恋人の今度の誕生日にはルビーの指輪を贈ることに決めた、哲也もそう決めた。

上記の例で、まず「そうした」、「そう決めた」という照応的表現 *anaphoric expression* (ここは厳密には代用表現 *substitution* といわれるものである) に注目しよう。それらはディスコースのなかのある一部分に依存しているが、当のその部分である指示表現 *referring expression* は、a、b のそれぞれにおいて明らかである。このような文法上の<言語的つながり>を結束性 *cohesion* という(結束性はまた、同一語彙を反復したり類義語とか関連語とかを使用するという意味での語彙上の<言語的つながり>の領域も含む)。これに対してこのような<言語的つながり>にも助けられ、類似関係、時空関係、因果関係、論証関係、常識・連想の関係等々で認知される、ディスコースの<意味的つながり>のまとまり、<意味のすわりのよさ>を整合

性 coherence という（われわれは特にテキスト分析の過程で、「これがひとつのまとまりをなしている」と記述するときはこの語を使用する場合は、これを首尾一貫性と訳す）。

さて上例 (1) で、cohesion の認知のされ方によってテキストが揺らいでくること、その結果 a と b とでは coherence に差ができていことにわれわれは注目したいのである。

a では人間二人に犬二匹、これは確かである。このような a のテキスト世界には侵入するはずもない、ある常識・連想の類が、実は b のテキスト世界に介在しうるのである。その常識・連想の類とは「三角関係」のことである。b を読みながらもし読者が、「哲也の恋人？ ひょっとして健一の恋人のことだったりして…」と問い始めたら、ここに新しい「トピック」が生じ始めているのである。「この話に出てくるのは要するに三人なのか？」と自問する読者のこの問の前で、テキストは新しく強かに隆起してくることに注目されたい。

一般にテキストがその場で語り出そうとしているのが「何についてであるか」を、読者がテキストに向かって問いかけるとき、この語用論的な開けの中で立ち現れつつあるものをエーコは <topic> と術語化し、<topic> は（ヴァン・ディクが示唆する）aboutness をテキスト上のさまざまなレベルに確立するのである、とする。

問いながら「もしや…」と考えてみる、この読者の推考 inference をエーコは明確にバースのアブダクション abduction に結びつける。仮設推考と訳せるアブダクション、帰納とも演繹とも異なり、観察科学としてのバース記号論の要諦をなすこの方法への通路をはっきり見据えることによって、エーコは topic の問題群を記号論に、むしろ記号過程の実践の問題に位置づけようとしているのである。

ところでテキストに読者が投げ込んで（あるいは読み込んで）理解を進めようとしたひとまとまりの <topic> のその内容、上例では「三角関係」という常識・連想が、読者にとって方々で見聞きし、あるいは自分もその渦中にある「よくある話」であるとき、エーコはこれを「相互テキスト的な intertextual シナリオ」であると術語化する[なお彼はこうした「シナリオ」に関しては、たとえば本職の銀行強盗が囃んでいる「共用の common シナリオ」と、素人が映画や小説や雑誌から仕込んできたにすぎない「相互テキスト的な intertextual シナリオ」との区別を立てている。その際 intertextual という術語に関し彼は、この文脈のなかで、クリステヴァの相互テキスト性を参照することを求めている]。

### 1.1.3 コンテキストと状況のイメージの喚起

前節では、ひとつの連文ディスコースの中で、その連文をつなぐ cohesion を推考する過程にひとつの topic が生じ（「おや、三角関係が進行しているのか？」注意：テキストはこのことを何も明示的に語ってはいない）、ここにシナリオが挿入されてコンテキストや状況のイメージが予想される場合を調べた。今度はひとつの単文ディスコースの中でのひとつの単語が核となってシナリオが紡がれ、コンテキストや状況のイメージが喚起される場合を調べる。

以下ではライオンの記号表現・語彙素、記号内容・意義素はそれぞれ、/ライオン/ 《ライオン》 というふうに表示する。

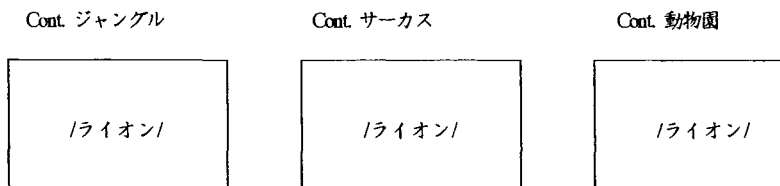
次の二つのディスコースを比較されたい。

(2) a 健太を動物園へ連れて行ってやらねばね。

b ライオンを動物園へ連れ戻さなければ。

同じ語彙素/動物園/がaとbとではコンテキストや状況についてそれぞれ別のイメージを喚起していることがわかる。前者は教育とほうびであり、後者は治安と監禁である。意義素《動物園》はaでは《いのちの友達の園》、bでは《危険動物の監禁施設》を共示する。幼児の生活ルーティーンにあっては、いのちは親、兄弟姉妹、友人こそが表現しているところのものだろう。それ以外のものの外観はいのちの不在をしか伝えないだろう。その外観の下から不在のはずのいのちが顔を出すところに、幼児にとっての動物園の楽しさ・うれしさがあるのだろう。警察消防の現場の従事者の生活ルーティーンにあっては、緊張を呼ぶ対象は<危険>であり、危険の有無、危険の除去がその関心であろう。/動物園/が喚起するイメージは、この語彙素を使用する主体の生活ルーティーンの一局面であり、この後者が<地>となって《動物園》という意義素が<図>として浮かび上がるのである。エーコはこれらを論ずるとき、《動物園》の客観主義的定義（後述）を前提にし、辞書を百科辞書に切り替え、コードの過剰化を考える。われわれはこのような意味の客体的定立を主観的スキーマ（後述）の側に牽還しこの下にこれを包摂する方向を目指す。われわれの目指す方向は、当該語彙が使用される、その具体的な生活空間を喚起すること、このことなのである。——外示、共示という術語をわれわれも使用するが、それは、プロトタイプとスキーマの関係（後述）の中に捉え返した上での便宜的な使用に止まる。

次のような思考実験を行ってみる。下のそれぞれの長方形はそれぞれの上部に記入された（言語的・非言語的）コンテキスト（Cont.）というフレームを予定している。各人がそれぞれのフレームの中に身を浸している気持ちになり、そのとき湧き上がるイメージを背景にして/ライオン/を想像してみよう。そこにどのような《ライオン》が立ち現れるだろうか。



その立ち現れ方を記入した下のようなカードを次々に、しかも多人数の間で作成する、という実験を考えてみる。

《ライオン》（Cont.ジャングル）＝獅子吼、莽猛、襲いかかれる危険などなど……。

（Cont.サーカス）＝訓練、従順、期待通りの行動などなど……。

（Cont.動物園）＝檻の中の生活、うつろ、生き生きしてなくて失望などなど……。

われわれは一意義素《ライオン》はすでに一テキスト、一物語を孕んでいる（むしろすでに潜在的にそれらである）ことに気付く。（むしろさらに、様々な生活ルーティーンの一局面としての意義素という意味で、その生活ルーティーンの多様さに注目すれば）一意義素《ライオン》はすでに潜在的に無数のテキストであると言える。「名辞は未発展の命題 rudimentary proposition である」、「命題は未発展の論証 rudimentary argument である」というバースの有名な言明を、われわれは認知言語学へと取り込む方向で理解する。

一語彙素/ライオン/が多重的に意義素《ライオン》を立ち現れるとき（テキスト重層性はすでにここに孕まれていた）、この多重性を規定するものは、/ライオン/が推及させる対象がどのような生活ルーティーンのかなかでどのように取り扱われるか、スキーマにおけるどのような局面が特殊具体的に profile されるのかの、その仕方であることは予想されるところである。「対象」の解釈が多重であることの可能性をエーコはバースの解釈項 interpretant

の中に探求する。その詳細やパース現象学と記号の第一次性、第二次性、第三次性、ならびに記号結合の重層的展開への言及等は割愛する。

#### 1.1.4 プロトタイプとスキーマ

パースの記号生成論を認知言語学の方に吸収し、エーコの客観主義的意味論を克服するために、認知意味論の根幹であるカテゴリー論の基本線を確認しておく必要がある。それはまた、エーコが力を込めて提示した、一語義素は潜在的な相互テキストなのであるという方向性が、より鮮明に、しかも主体化主観化されて、解明されうる可能性を求める探求の一環でもなければならない。

われわれは《記号内容》にどのようにして出会うのか、このことを辞書論、百科辞書論から解放される方向へと問うことが、われわれのさしあたりの課題である。そのことを「犬」についてその定義（普通に理解されている限りの）と、そのプロトタイプおよびそれに対応するスキーマとを、(ラネカー Foundations I.369-386 その他を参照しつつ)対比してみたい。

試みに広辞苑（第五版）の「犬」の項を検索してみる。

「ネコ目（食肉類）イヌ科の哺乳類。よく人になれ、嗅覚と聴覚が発達し、狩猟用・番用・軍用・警察用・労役用・愛玩用として広く飼養される家畜。品種も日本在来の日本犬（秋田犬・柴犬など）のほか多数あり、大きさ・毛色・形もさまざまである。」

見られるように、「犬とは何か」を定義するに際して、客体の側の諸規定（意味素性）の組み合わせが提示されるわけである。

ところで我が国の高校の英語教科書は、日本での社会生活が時代と共に進んでいく方向を、主に英語圏の先端的事例を紹介することによって指し示すことに vivid なものがある。そこには公害問題・資源問題・女性問題等々と並んで partner dogs あるいは independence dogs についての読み物がよくみられる。先進国の高齢社会化、福祉社会としての成熟を考えれば、independence dogs というカテゴリーが犬というカテゴリーを構築するプロトタイプの事例となっても不思議がないとわれわれには思われる。それは次のような動きを考えてのことである。

近所のあれこれの犬を見て子供が「うちでも犬を飼ってよ」と両親にねだるとき、まさにその子が飼いたくなるような犬がその子にとっての犬のプロトタイプであり、その際、この範囲の種類のメンバーとなる<sub>1</sub>犬、<sub>2</sub>犬、<sub>3</sub>犬、……、<sub>i</sub>犬、を包含した抽象的規定[犬<sub>1</sub>]がそのスキーマである。その子が大人となり、帰宅した自分に吠え吠え跳びついてくることにこれ以上はない慰めと対話の相手を痛感するなら、そのようなものとしての犬こそが、大人となった彼あるいは彼女にとっての犬そのもの（プロトタイプ）である。このように日々の生活ルーティーンを背景にして上のごとく主観的に profile された犬の新しい抽象的規定はスキーマ[犬<sub>1</sub>]として拡張される。もし、「この犬がいるから自分は朝晩の運動が出来て健康でおれる」ということをしみじみとその人が思う場合は、またそれに対応する[犬<sub>3</sub>]へとスキーマは拡大されよう。

さて、身体が不自由な人がそれでも自立して人間としての尊厳を輝かせつつ為すべき事を為しうするために貴重な支援を惜しまない、この人たちの掛け替えのない友である犬たちは、independence dogs と呼ばれる。介助犬という呼び名をもってしては表現できない、この生命人格思想を反映す

るスキーマ[犬<sub>n</sub>]は、

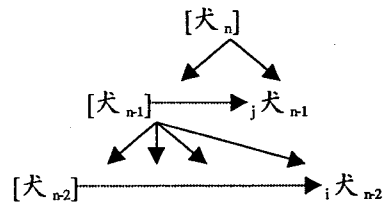
＜人間が人間であり得るための掛け替えのない友である小動物＞

とも表現し得、これは自余の様々なスキーマ[犬<sub>j</sub>]を自らの下位スキーマとして包摂しうる「超スキーマ」そのものであろう（上に例示したスキーマ[犬<sub>1</sub>]、[犬<sub>2</sub>]、[犬<sub>3</sub>]などなどについて下線を施した部分は、ことごとく、上記スキーマ[犬<sub>n</sub>]の＜＞内の記述内容のうちにおさまる、個々のスキーマは超スキーマの具体化とみなされよう）。そしてこのように呼ばれる犬たちの周縁への広がりの中でその中核に位置する犬たちは、最も強い意味でのプロトタイプのものたちである。

このような超スキーマとそれに対応するプロトタイプは時代と共に変化するし、複数が並存しうるし、文化圏によって全く異なる様相を呈しうる。

われわれが/犬/と語るときにその意味として立ち現れる《犬》とは、このような喚起された諸生活ルー

ティーンの重ね合わせを背景とし、その中に浮かび出る一局面としての何かなのであって、客体の意味素性のみを格納した限りの、従来の辞書の中に客体化されたものなのではないのである。



### 1.1.5 isotopie, isotopy、同位体

1.1.2 では、テキストが語るの「何についてか？」と読者が問うとき、そこに topic が生じるのである、ということを確認した。エーコも明確に述べているごとく、topic は読書過程に即して次々に生じて通時的な系列(T<sub>1</sub>、T<sub>2</sub>、T<sub>3</sub>、T<sub>4</sub>、…)をなすはずである。この系列は必ずしも何らかの一貫性をもつものではないし、当然のことながら互いに打ち消しあったり無関係であったりする。問題なのは共時的に、だから同じテキスト箇所、topic は重層しうる、ということであった。あの箇所のディスコースの例では「三角関係」が有るのと無いのとでは、読者の眼前のテキストは全く別物となるのであった。断片的な数々の（場合によればただ一つの）topic がひとつの coherent なまとまりをテキスト上に構成するとき、そのまとまりをエーコは『構造意味論』ならびに『意味について』のグレマスにならって isotopie<sup>2</sup>と規定する。エーコの isotopie 論は、テキストが coherent なまとまりを得る所以の条件をそそえ確定していくという方向にではなく、テキストが実際に多様な読みを、読みのレベルに応じて、可能にしている具体的な様態を系統的に指し示すという方向に展開される。その具体例をもうすこし見ておこう。

#### (1) Un ami des simple.

コンテキストは人間のあり方・振る舞い方なのか？それとも植物（薬草）なのか？と問うこと（ないしそのような「語用論的仮設」）で topic が生じる。ここでは二重化した《simple》の内容の選択（垂直軸だから範列的）が問われていて、「飾り立てないことを好む人」という意味が出現したり、あるいはこれと排他的に「薬草の愛好家」という意味が出現したりする。それぞれの意味がテキスト上で首尾一貫性を獲得するとき、少なくとも二つの「同位体」が出現したのである。

#### (2) They are flying planes..

コンテキストは人間の行為についてなのか？それとも空中を移動する物体なのか？と問うことで topic が生じる。「彼ら」の動作が進行中なのか、それとも「それら」の「何であるか」が告げられ

ているのか。確かに二重化した《flying》の内容という範列、垂直軸の選択も結果的に要求されているが、基本的には、連辞、横軸での共指示 co-reference への間によって topic が生じているのである。排他的に出現する「同位体」が喚起する生活空間の具体的な在り方の相違そのものこそが注目されるべきなのである。

このような単文でどういう規定をもった「同位体」がどのように成立しているかを調べ、これを単文から連文に拡大し、エーコはついにはダンテの詩編解釈の書簡において、「同位体」が歴史的・字義的に、寓意的に、道徳的に、神秘的・天的に重層的に成立する姿を分析するに至るのである（ただし、こうしたいわゆる聖書四義説に関連する項目についてのエーコの叙述は、われわれの期待に反して、極めて部分的であるが）。

### 1.1.6 ヨハネ「福音書」9章前半部に重層するいくつかの同位体

9章の物語は、われわれの分析によれば、「盲目で生まれた」主人公の「悲劇」を通じて読者の自己確信を根底から転倒させ、「生まれる」ということの新しい意味を実現する、というものである。その中で上のテキスト範囲は、主人公の両親が権力者のユダヤ人の前に召喚された「査問物語」である。

ところでヨハネ「福音書」9章のわれわれの要約を一読して奇異に感じられる方がほとんどであろう。誰がみてもあそこには「眼疾の治癒物語」が語られているのであり、主人公の「悲劇」どころではなくその逆である、と考えられるであろうからである。しかし、そのような「外観」は読者が物語過程へ巻き込まれてしまえば吹き飛んでしまうのであった。物語過程に出現した結果をまとめれば、次のような次第を追っていることがあきらかとなったのである。

読者であるわれわれは読解の過程で次の問を發せざるを得ないが、以下の各ステップ（＝topic）はわれわれのこの問への答として、順次テキスト表面に登場してきたのであった。

問：[93c「神の業がこの人に現れるためである」という言葉の中の

<この人において現れる神の業＝栄光>は何なのだろうか]

答：A)【この栄光とはこの人の「目が癒やされる」ということである】

初読レベルの読者が誰も抱く理解（障害に苦しむ読者には例えようもなく慰めに満ちた福音として掴まれてきた解釈視座）、これが転倒される。

B)【その栄光とはこの人が「上から新しく生まれる」ということである】

この新しい理解が生まれる（選択軸での「生まれる」という系列の言葉の冗長な反復、結合軸での「洗礼」関連用語の意識的な散開、9章末-10章はじめとニコデモ対話との密接な関連、そして後者は洗礼論であること）。「盲目である」ということの否定の言葉は「目が開いた」、「見えている」という過去ないし現在の時制でのみ語られていることが気付かれ、その理由が納得できる。物語の主題は水と聖霊による洗礼であり、主人公の上からの生誕であり「目が開いた」、「見えている」のはそのたんにひとつの結果なのであり、上の時制表現はそれを物語っているのである（主人公が上からの新しい言葉を恵まれたことも結果のひとつである——主人公は「それまで何も話していなかった」事実<sup>1</sup>に気付いて読者は愕然とする）。逆に期待、目的の発語様態、「目を開けて欲しい」「目を開けてあげよう」は全く記述されていなかったことに気付いて、読者は自分の先入観の強さに衝撃を受ける（イエスの業は「目を癒やそうとすること」であろうとの予想は、読者側の無意識の遠近法でしかなかったのである）。新しく気付かれたこの驚くべき理解もやがて転倒される。

C)【あの栄光とはこの人が「イエスを証して殉教の死を迎える」ことである】



という予想が読者に抱かれ始める (9,34 会堂追放では、実は implicit には殉教が語り出されているのではないかと推考されるようになる)。

われわれがいま問題にするのは、＜一個同一のテキストの一個同一の範囲に読み取られる意味世界＝同位体が、(たとえば蒼穹、天の大海、樂園、神の王座と語られたりもする、神学的諸天の重層に似て) 順次三段階に推移していったが、書かれている言葉は何も変わっていないし、この推移を示唆さえしていない＞という、この事実なのである。

上記テキスト範囲でのわれわれの読解経験を振り返ってみると、読解過程での三段階の推移順序は (各段階を＜飽和＞させつつ移行するという意味では) 不可変である。上掲の段階 A から C へとリープしないし、最初に B が読みとれて次に A が読めるということとはありえない。書かれている事柄総体は不変であり、しかしいきなり C が読みとれることはない——すると当初は C を見るべき視力が麻痺しているか、退行しているか、未発達なのである。しかし C を構成している単語  $c_i$  (ただし  $c_i \in C$ ) のいずれもが初読の際に見落とされるということとはありえない。むしろその単語  $c_1, c_2, c_3$  等々は少なくとも読まれていたはずであるが、C の同位体を担う意義素としては読み取られなかった (そのときそれらは A か B の同位体を担うものとして読み取られるか、あるいはそれらの同位体にとって過剰な意義素として読まれていた) ということである。したがって上記＜視力＞とは同位体を構築していく統覚力と相關した読者側の何かである。

読解場面でテキスト上にひとつの同位体が構築され統覚される条件を厳密に規定することをここで行うことはできない。次のことだけを確認しておこう。テキスト内あるいはテキスト外のコンテキスト、読者側の先入観、受容美学にいう視点・視野・遠近法・レパートリー、われわれのいうスキーマによっては、＜単語  $c_i$  が全くなくても同位体 C が読み込まれること＞もあれば、＜ $c_i$  が相当数そろっていても同位体 C が登場していることが依然として気付かれないままであること＞もあるということ、これである。こうした前提の上で、＜いくつかの単語  $c_1, c_2, c_3$  等々が確かに同位体を構築していてそれが C として理解しようということ、そして逆にこれらの単語それぞれがこの C という世界を反映する意義素であると理解しようということ＞、このことが読者において明らかになったとき、そのときわれわれは「同位体 C が飽和された」(過少、過剰の飽和も定義される)、ということにする。われわれの如上の経験では、同位体 A が飽和されたときにはじめて、余剰のものに疑惑の視線が注かれ、そこから同位体 B が構築され始めたのである。

本小論でわれわれは語彙素／ $\pi\iota\sigma\tau\epsilon\omega\omega$ ／を中核とする語彙素群の用法分析を行う。その際、テキストの当該箇所によどのような同位体 X が出現しているかによって意義素  $\ll \pi\iota\sigma\tau\epsilon\omega\omega \gg$  等々の内実は異なってしまう。この差異に注目することが重要なのは、ある語彙素が辞書上の意味項目のどれに属するかではなく、この語彙素をこういう意義において使用させている同位体 X が喚起している経験的生活空間の具体的な様相へと、この差異がわれわれを導き入れるからこそなのである。このような経験的生活空間の具体的な様相のなかからどのようにして問題の語彙素が発生したのかの考察こそが、語彙素の用法分析の眼目なのである。

しかしここでわれわれの方法的観点からは語彙素、意義素ないし記号表現、記号内容という術語は全くミスリーディングなものとなってしまっていることを確認しよう。

いわゆる記号表現をこれからは「シニフィアン」と呼ぼう。ヨハネ「福音書」読解のための記号論によって、ある語彙の発信者・受信者にとっての「聞こえ」が根本的に重要であることに留意し、聴覚映像という含意を強調したいからである。他方、記号内容という術語でわれわれがむしろ強調してきたことは、辞書に客観的・一般的に抽象して格納されている語義ではなく、記号使用において浮かび上がる経験的生活空間の特殊具体的な様相である。この側面をわれわれは「スキーマ」と呼ぶことにする。

## 1.1.7 ヨハネ「福音書」におけるシニフィアン／ $\theta\epsilon\omega\rho\epsilon\omega$ ／の超スキーマ

### 1.1.7.1 エーコによるシニフィアン／ライオン／のスキーマ分析にらって

ルービンのつばの絵で有名なゲシュタルト心理学における〈地〉と〈図〉の関係は、認知言語学の形成にとって甚大な威力を発揮している。上記1.1.3 でわれわれが言及したエーコの／ライオン／の分析は、彼の本来の論旨を改編したものである。彼はあの場で、一記号表現／ライオン／の「客観的定義」は、コンテキストがジャングル、サーカス、動物園となることによって「百科辞書的に多様」であること、そしてそれはなぜであるのかを、構造言語学とバースを発展的に継承しつつ呈示しようとしていたのである。われわれは彼の「コンテキストと状況」という考えを認知言語学のフレーム知識論の内部へ吸収した。われわれが記述した思考実験（記号表現／ライオン／を記入して残りは白紙にしているカードを使い、コンテキストの違いに応じて別々に出現する語用論的な意味をも含めて記号内容として記入したあの実験）は、われわれの改編による付加である。このカード実験を、認知言語学の方へとさらに引き寄せながら、ヨハネ「福音書」におけるシニフィアン／ $\theta\epsilon\omega\rho\epsilon\omega$ ／（24例出現）の分析に適用してみたい。以下の引用文中、下線を施した「見る」の箇所はすべて原文では  $\theta\epsilon\omega\rho\epsilon\omega$  である。

#### Cont. 1

<sup>6:19</sup> 二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。

<sup>10:12</sup> 羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。…狼は羊を奪い、また追い散らす。…

#### Cont. 2

<sup>6:62</sup> それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。

<sup>16:10</sup> 義については、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなることを、

#### Cont. 3

<sup>20:6</sup> 続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。

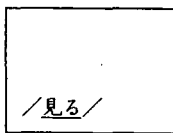
<sup>20:12</sup> イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。

#### Cont. 4

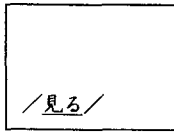
<sup>4:19</sup> 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。」

<sup>6:40</sup> わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

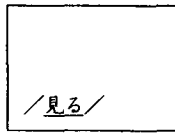
#### Cont. 1



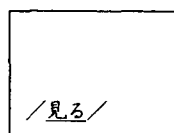
#### Cont. 2



#### Cont. 3



#### Cont. 4



#### スキーマ「見る」

(Cont. 1) = 自分へ向かってある対象が遠くから接近してくる、この対象は一目で恐怖を惹き起こす。主体は対象が遠くにある、その距離感を透かして見るが、この距離感が恐怖を拡大する。しかも喚起された恐怖を通して対象を見るが故に、恐怖は一挙に深化精神化される。こうしてこの「見る」はたんに一視覚の事柄であるのではなく、身体＝精神全体を震え上からせ逃亡へと駆り立てるほどの、強い情感性を円環的に生産しつつ、それを媒体として「見る」のである。対象関係の間に介在し、むしろこの特殊な対象関係を成立させる所以の身体＝精神的「距離感」は底深い「知りえなさ」の淵を抱え込んでいて、恐怖は宗教的畏怖につながりうる<sup>3</sup>。

(Cont. 2) = 自分に親しい対象が遠くへと去っていく、強い喪失の嘆きを惹き起こす。見るというスキーマに内在する身体＝精神的距離感が、喪失という悲しみによる距離感によって増幅される。そしてこの悲しみの距離感が意識され、それを透かして「見る」のだから、主体は「悲しい見え」をしかることができなだらう。そのひとつの極限が次の (Cont. 3) である。なお嘆きと悲しみ

の激情は余りにも強く、この種のセオーレオーの発語を聞く受信者の情感をも掻き立てる。シニフィアン／セオーレオー／の喚情性の持つ、この強力な語用論的作用に注目したい。

(Cont.3) = このテキストを読み聞く者が (Cont.2) の、「喪失という悲しみの距離感」を強く抱え、これを透かして対象を「見る」かどうか、そして対象を見た瞬間に一目で、たとえようもないある種の激情に駆り立てられるかどうか、がポイントとなる。直接の対象が制止していることが逆に、この場をしりえにされた真の対象イエスが遠方へと去られていく動きを強調することとなっている。

(Cont.4) = 「見る」ことが惹起する強い身体＝精神的な激情性は、受信者の身体を駆り立てて、対象から逃れさせようとしたりそのもとへと走り寄ろうとさせたりするばかりでなく、痛切な思いを観念世界へ強く遠く投影させる。ここに作用する判断力は眼前の特殊を起点領域にし、普遍を標的領域にして前者から後者への写像を行う「反省的判断力」である。術語セオーレオーの根本的な特性としての「距離を隔てて情感を強く触発させられて見る」ということのその距離感、主体が対象を最大限高貴に判断してもなお未来終末論を脱し得ない、という点に鮮明に現れる。4.19のサマリアの女の告白は、ベタニアのマルタの告白と対応し合っていて、ともに未来終末論の内部の語りである(拙論『エイドー』参照)。640も文面から明らかなくとも未来終末論の語りである。術語セオーレオーが使用されている限り、4.19も640も対象イエスから隔たっているのであり、(徹底的な区別のもとでの、賜物としての)「一体」が生じ始めてはいないのである(後記2.2.1の、マグダラのマリアがイエスに遭遇する場面の考察を参照されたい)。物語推移として6章は、信者がその「一体」へと上昇していく過程での谷間に位置している。

優れた認知言語学者なら上のスキーマ全体を説明するにあたり、息を呑むような図解を呈示することであるだろうが、われわれにはその力がない。だがこれは挑戦し甲斐のある個別課題である。

#### 1.1.7.2 シニフィアン／θεωρέω／のリアリティー(親スペースR)は「十字架以前」にある

上掲コンテキスト2番ならびに3番というかたちで出現しているスキーマによって読者はおそらく推察されるであろうが、ヨハネ共同体が使用するシニフィアン／セオーレオー／の超スキーマは

去って行かれるイエスを、強い喪失の痛みを持って見上げる (見上げるが見えない)

である。次のテキスト箇所は、この超スキーマが具体化されたものとして読むことができよう。

16:16 「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、

またしばらくすると、わたしを見るようになる。」

16:17 そこで、弟子たちのある者は互いに言った。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。」

16:18 また、言った。『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。

何を話しておられるのか分からない。」

16:19 イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。

『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。

16:20 はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。

あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。

16:21 女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。

しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。

16:22 とここで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、

あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。

下線を施した見るはθεωρέωの現在形、四角で囲んだ見るはὁράωの未来形 ὁρῶμαιである。

16,16.17.19に三回連続することによって極度に強調されて登場している注目すべきパロールをもう一度聞いてみよう。

<sup>1616</sup> 「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」

16:16 Μικρὸν καὶ οὐκέτι θεωρεῖτέ με, καὶ πάλιν μικρὸν καὶ ὁψεσθέ με.

この十一語文のうち、ただ一語 οὐκέτι だけを οὐ に変更して、あと二回連続して語られているのである。「しばらくするとイエスを見なくなる」という激越な悲しみ。イエス受難物語に明確にメンタルスペースMを設定し、発話主体のリアリティー（観スペース）を「十字架以前」に設定した言語活動の中に、シニフィアン／セオーレオー／使用のプロトタイプはしっかりと位置づけられている。イエス十字架刑を前にして逃亡した第一世代の屈辱を生き直すかのように、ヨハネ共同体は自らのリアリティーの根を「十字架以前」の痛切な悲しみの深みへと飽くまでも張り渡していこうとする。その苦痛はイエスにより約束された喜び、つまり「しばらくして」またイエスに遭う、ホブソマイする、という喜びの約束に支えられている。ホブソマイもまたここでの用例がそのプロトタイプとなっている。つまり喪失を悲しみのうちにセオーレオーし、再会を喜びのうちにホブソマイする。否定形現在のセオーレオーが「内包する悲しみと肯定形未来のホブソマイが内包する喜びとは本来一組のものとして使用されるものである。16:20bはセオーレオーとホブソマイとのこのような厳密な対比の圧縮表現である（16:20bの「喜び」と16:20aの「喜び」とを並記するのは後述する「ヨハネの鏡」）。16:22で注目すべきは、ホブソマイの双方向性が語られていて喜びは飛躍的に甚大となっているという点である（イエスの約束は「君たちはわたしを見る」というにとどまらず、「わたしは君たちを見る」というものであるのだ！イエスは見るに來られるのだ、だからわれわれは見るのだ！）

セオーレオーとホブソマイとが対比的に一組となっているという事実からわれわれが確認しておかなければならないことは、セオーレオーがホブソマイによって逆規定されている、ということである。つまり、将来の霊的喜びのうちで「見る」というホブソマイのスキーマに対するものとして、セオーレオーは、「見れない」という現在の地上的悲しみを嘆くというスキーマへと強く限定されているのである。「（もはや）見れない」という強い悲しみを受信者に語用論的に喚起し得てはじめて、つぎのテキストは意味を発揮しうるのである。下の引用文中の「人の子も上げられなければならない」とはルカ的な外部注的説明言語の「デイ」なのではなく、「<sup>1618</sup>それでは、人の子がもいた所に上るのを見るならば……」というときのこの「見る」（ことができない）、セオーレオー（できない）が誘発し触発する強い悲しみが基盤にあるのである。

<sup>1613</sup> 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。

<sup>1614</sup> そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

<sup>1615</sup> それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

ここにもまた「高く上げられていくイエスを見上げる」ルカのテーマをデフォルメする、ヨハネならではのテキスト戦略が貫徹されている。同様なことがルカの「イエス顕現物語」のヨハネ的デフォルメとして出現していたのであった（拙論『わき腹』）。つまりそこでもまた、歴史家の外部注的説明言語を語るルカテキストをデフォルメしてヨハネ喚情言語は、受信者の内部から激発する身体＝精神的情感性を信じてこれに内容の自由で自然な展開を委ねる方向を打ち出していたのだった。

#### （追記）

ヨハネ「福音書」では術語ὁράω（全30例）は純粋に戦略的に使用されていて、完了形ὥρακα（全20例）のプロトタイプは「神を見る／キリスト＝復活のイエスを見た証言する」であり（後述）、未来形ὁρῶμαι（全10例）のプロトタイプが「十字架後にイエスを再び見る」である。見る主体が神の光に照らされ明るんでいることを同時に示していることが両者の強烈な特徴である。

ここにὁράωの通常用法の転倒がある。日常的にはθεωρεῖωの「観察の気持ちを持って注意深く見る」とὁράωの「目を開けていれば見える」とが対比的である。ヨハネ共同体の言語使用では、人々の意識せずに使っている日常語の地上性を転倒し、これに霊的性格を孕ませる、という強力な志向性がある（後述の「スキーマの上昇」）。この意味でヨハネ「福音書」のὁράωに関しては、上から新しく生まれた者が「見た」と口にしたら、神との関わりにある何かが主体に入り込んでいるということを言明しているのである。

## 12 「ヨハネの鏡」

### 12.1 「ヨハネの鏡」の典型例 「派遣する」・「捜す」のテーマ

例えば

<sup>122</sup>そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければ

なりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」

に出現している「派遣」のテーマは、洗礼者ヨハネが「神から遣わされた」（1,6）ことと、このヨハネのもとへと「エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちを遣わし」たこと（1,19）との対応を浮き出たしている。また

<sup>72</sup>ファリサイ派の人々は、群衆がイエスについてこのようにささやいているのを耳にした。

祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスを捕らえるために下役たちを遣わした。

という場面は、イエスの死が象徴的に語り出されている重大な場面であるが、父なる神によって派遣されたイエスに向けてサンヘドリンから派遣された捕縛吏達が急行するのである。この「派遣」のベクトルどうしの衝突は、弟子派遣と弟子受難を浮き上がらせるものとしても機能している。

また「求める／捜す」というテーマは6章では群衆がパンを「求めて」イエスを「捜す」のであり、これは7章でのサンヘドリン側がイエスを殺すことを「求めて」イエスを「捜す」ことに対応している。当然これは、地上を去られるイエスを信徒達が「捜す」ということを浮き上がらせる機能を果たしている。

あたかもひとつのテーマが合わせ鏡の中に多様な像を結ぶような、この種の極めて意識的戦略的な対応関係がヨハネ「福音書」では多用されている。この種のレトリック構造を、われわれは細かい規定を一切避けて一括して、「ヨハネの鏡」と呼んできた。その実例は枚挙のいとまもない。この「ヨハネの鏡」もまた、ひとつのシニフィアンをめぐる多様な意味出現の現場である。

### 12.2 スキーマの上昇・降下

「ヨハネの鏡」としても次の例は異様であり、稚拙強引であるときえいわれかねないものである。

群衆から呈示される／知っている／と、イエスから呈示される／知っている／。ひとつのシニフィアンのもつ二つのスキーマの衝突の場面に出現する落差に注目されたい。われわれは以下に考察するような、地上的スキーマと霊的スキーマという二つの次元間でのスキーマの揺らぎを（多義性一般、外示と共示一般と区別して）、「ヨハネの鏡」におけるスキーマの上昇・降下と呼ぶことにする。

AA

A <sup>7: 26b</sup> 議員たちは、この人がメシアだということを、真に認めたのではなからうか μήποτε ἀληθῶς ἐγνώσαμεν。

BI <sup>7: 27</sup> しかし、わたしたちは、この人がどこからであるかを知っている ἀλλὰ τοῦτον οἶδαμεν πόθεν ἐστίν

BII メシアが来られるときは、どこからであるか、だれも知らないはずだ。」

ὁ δὲ Χριστὸς οὐκ ἐρχεται οὐδεὶς γινώσκει πόθεν ἐστίν

<sup>7: 28</sup> すると、神殿の境内で教えていたイエスは、大声で言われた。ἐκραξεν οὖν ἐν τῷ ἱερῷ διδάσκων ὁ Ἰησοῦς καὶ λέγων

C 「あなたたちはわたしのことを知っており、

Καμὲ οἴδατε

B'I そして、わたしがどこからであるかを知っている。

καὶ οἴδατε

πόθεν εἰμί

B'II わたしは自分勝手に来たのではない

ἀπ' ἐμαυτοῦ οὐκ ἐληλύθα.

A' わたしをお違わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない *hūeis oluk ol'darte*。

BI と B'I とは同一のシニフィアン／知っている／のもとで全く別のスキーマが指されている（前者は地上的知、後者は霊的知）。

ここではテキストは非常に「強引な論法」を採っているように見える。しかし、誤解してはならない。この際だった異様さ（構成された形式美の中でのそれ）によってテキストが受信者の心に喚起しようとしている重大な事実、

同じシニフィアンのもとに霊的事実を地上的事実としてしか理解しないということ（スキーマの降下）が、日常言語の中に生きる人々の常であり、そのことの方が「強引な論法」であるのに、人々はそうとは考えないということ

このことなのである。人々が自信を持って「われら知れり」と言明するということは、当の本人は地上的知によって打ち固められている、ということである（よく似た議論が9章末尾に出現している）。だからこの言明はむしろ逆に、霊的知の芽ばえる余地が全くない（スキーマの上昇不能）という意味で、全くの無知の露呈そのものである。この場面ではこうした「知の無知」（スキーマの上昇不能）という事態が、キリスト論の根幹において、浮き上がらされている訳である。

他方で逆方向から考察すべき、ゾーエー的アイロニーとわれわれの呼びたい、注目すべき事態が重要である。それはこういう場合である。いまある人が「わたしは知っているのだ、オイダ」と言明したとき、主観的には地上的事実xが意味されているとみなされるところ。しかし「客観的」現実的には、そこには霊的事実Xが語り出されつつある、という事態（スキーマの上昇）がありうるのである。われわれはこの次元の方をより一層重視する。つまり

日常言語の中に生きる人々が主観的には地上的事実を意味しているつもりで語り出したシニフィアンが、「客観的には」、霊的事実を孕んでいて（スキーマの上昇）、その会話空間の中にこの霊的事実が動き始める、ということがありうること

これである。あるいはもう少し掘り下げれば

日常言語の中に生きる人々が主観的には霊的事実を意味しているつもりで語り出したシニフィアンは、「客観的には」地上的事実を意味しているに過ぎないが（スキーマの降下）、それにもかかわらずさらに「客観的には」、その言説の中のそのシニフィアンにも霊的事実が孕まれていて（スキーマの上昇）、会話空間の中にこの霊的事実が動き始める、ということがありうること

となろう。おそらく人間が「信じる」ときの言明、告白は、このようなもの以上でも以下でもないであろう。人間の「信じる」ことは神の目に誤解でしかないであろう。しかしそこにその都度ゾーエー的アイロニーが働き、「信じる人」はこのような神の翼の中に包まれ包まれしながら運び上げられていくのであろう。また例えば、ベタニアの家でマルタがマリアにイエスの言葉を告げた語りの中にも、上のゾーエー的アイロニーが強力に作用している(拙論『エイドー』)。

このような「アイロニー」も含め、上記AAには、地上的議論の紋びのようにみえる割れ目から霊的パロールが出現しているのであり、われわれにはこの箇所は極めて重要なテキストであると思われる。

シニフィアン／*πιστεύω*／を中核とするシニフィアン群の用法分析を遂行するわれわれは、「ヨハネの鏡」の中でひとつのシニフィアンのスキーマが、上記のような上昇・降下をする様相を目撃することもあるのである。その際には、「語義」の多様ではなく、その場に立ち現れる経験的生活空間そのものの多様を、可能な限り明瞭に浮かび上がらせることが要求されるのである。

## 第2章 ヨハネ「福音書」における「ピステウオー」の大枠は、「見ること」で固めてある

### 21 冒頭章末尾の「ナタナエル物語」と本文最終章末尾の「トマス物語」との構造的対応

## 2.1.1 「ピステウオー」の転倒、さらにその転倒

ヨハネ「福音書」の冒頭章、本文最終章のそれぞれ末尾を飾る二つの小物語は大胆で厳格な七段の対応を示している。それは下の対照表を一覧すれば誰の目にも鮮明に見て取れる。このような意識的で強力な対応を示すテキスト生産の動力は、どんな重大な意義を孕んでいるのだろうか。

いまそれを、ひとつには「ピステウオー」の転変、ひとつには「見ること」というモチーフの一貫性、という、二つの観点から考察することになしう。

BB

[1]

<sup>145</sup> フィリポはナタナエルに出会って εὐρίσκει 言う。  
「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも  
書いてある方に出会った εὐρίσκαμεν。  
それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」

[2]

<sup>146</sup> するとナタナエルが、「ナザレから何か良いものが  
出るだろうか」と言ったので、  
フィリポは、「来て、見なさい Ερχου καὶ ἴδε」と言う。

[3]

<sup>147</sup> イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て  
εἶπεν、彼のことをこう言われた。「見なさい ἴδε。ま  
ことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」

[4]

<sup>148</sup> ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられる  
のですか」と言うので、イエスは答えて、「わたしは、あ  
なたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの  
木の下にいたのを見た εἶδον」と言われた。

[5]

<sup>149</sup> ナタナエルは答えて。  
「ラビ、あなたは神の子です。  
あなたはイスラエルの王です。」

[6]

<sup>150</sup> イエスは答えて言われた。  
「いちじくの木の下にあなたがいたのを見た εἶδον  
と言ったので、信じるのか。

[7]

もっと偉大なことをあなたは見ることになる βῆθη。」

<sup>2025</sup> そこで、ほかの弟子たちが、  
「わたしたちは主を見た εὐράκαμεν」と言うと、

トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見 ἴδω、この指  
を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に  
入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

<sup>2026</sup> さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマス  
も一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエス  
が来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」  
と言われた。

<sup>2027</sup> それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに  
当てて、わたしの手を見なさい ἴδε。また、あなたの手を  
伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではな  
く、信じる者になりなさい。」

<sup>2028</sup> トマスは答えて、  
「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

<sup>2029</sup> イエスはトマスに言われた。  
「わたしを見たから信じたのか。  
Οτι εὐρακάς με πεπίστευκας

見ないのに信じる人は、幸いである。」  
δι μη ἰδόντες καὶ πιστεύσαντες

対応第1段。後述する如く、ヒューレーカメン、ヘオーラカメンとはヨハネ共同体を成立させている、証の根源語であり、これが対照的に併置されている。対応第2段ではナタナエルもトマスも異口同音に第1段の証を否定する。この証を肯定することを二人の信じるころのものか許さないものである。対応第5段で二人は自らの信じていたころのものか転倒されるのを経験し、ともに告白の言葉を口にする。その発語形式は、一方は「あなたはAのBです、あなたはCのDです」、他方は「わたしのEよ、わたしのFよ」と対照される。ここで属格語が「神」、「イスラエル」から「わたし」へと転じていることには深い意味があるはずである。共同体の信、個人の信という次元で議論される前に、ヨハネ神学が心の深部に徹入していることへの注目が徹底されるべきであろう。

われわれはいまは、トマスの告白を「主と神とによってこのわたしは<場所を占められてしまっている>α837bβ」と語り出して  
いるものとして聞くことにする。そしてさらに、この告白は主なるイエスに向けてであることによってとりもなおさず、イエスにお  
いて<場所を占めておられる>神へ向けてのものである、と理解しておく。

対応第6-7段は、二人のこのような告白自身もさらに転倒されることを告げている。

しかしトマスの告白の転倒とは、このトマスのパロールにおいて、トマスが「自覚的に語ったつもり」のスキーマが、トマスが「無意識のうちに吐露した」スキーマによって転倒される（スキーマの上昇）、という構造を持っている（拙論『わき腹』）。これについて圧縮して再説し、さらにこの転倒が「信じることをどこへ向けて深化させることであるか」を見極めるためには、上記対照表のなかに出現している、「見る」というシニフィアンのような様々なフレームをまず明確化するという道筋を辿ることが有効である。

その準備として、上記対照表に出現したレトリック構造の中で意識的に対比されている「視覚言語」について概観しておこう。

対応第2段では動詞 *εἶδω* が対比されている。フィリポの口に出る *Ἐρχου καὶ ἰδε* はヨハネ共同体のイエス礼拝の根源語、「来たりませ、みそなわしませ」である。これは本来はイエスに向かって語られる言葉であるが、いまはナタナエルに向けられている（同様の転用は上掲1,45のヒュースケイにも見られる）。イエス礼拝において「イエスをエイドーする者」はイエスから命を吸入するのである。また「イエスがある者をエイドーされる」とき、この人はイエスから生命の恵みを受け始めるのである。ところがトマスの口に出るエイドーはこれとは全く次元の異なるものである。それは上のような祝祭的輝きをみせるイエスをエイドーする、イエスがエイドーするというゾーエの働きとは雲泥の差の（イエスへの／からの視線という緊張から完全に逸脱した）「証拠固めの見る」である。この呆氣にとられ笑いを誘うような奇妙な対比（ヨハネの鏡!）はしっかりと記憶されなければならない。

対応67段では動詞 *ὁράω* の2形態と動詞 *εἶδω* の2形態とをそれぞれ結んだ線が、十字に交差する形で対応させてある。これほど強烈な意識的対比を前にすれば、ヨハネ「福音書」で「見る」がどれほど重視されているか想像するに余りあると言わざるを得ない。後述するようにヨハネ共同体のホラオーのプロトタイプは「上から新しく生まれて、神を見る眼を賜った者が見る、見える」である。

さて、上掲左枠の「ホラオーの未来形」はイエスの将来予告、約束であり、これと対応する右枠の「ホラオーの現在完了形」は実現完了、つまりイエスの未来形での約束の、トマスにおける現在完了形での成就の祝詞である。すなわち右枠最上段の、共同体の証の言葉「わたしたちは主を見た」を語れる者に、「トマスよ、君もこれでやっとなれたか」、という喜びである（「スキーマの上昇」：このカテゴリーをわれわれが使用するの、ヨハネ「福音書」が平易な日常語を全く霊的次元の神学的術語に転じて使用することがよくあり、読解がこのときの日常的表面的な語義に引き寄せられ置いてしまいかねないことに注意する意味もある）。

他方、こうした祝祭的なホラオーの対応線と交錯するエイドーの線はどうか。左枠は「イエスがある者をエイドーされる」ということを、イエス礼拝から離れた次元で誤解している者（ヨハネの鏡!）、こういう境涯に立つ者の「信じること」に対するイエスのたしなめである。これに対応する右枠のエイドーは、まさに上掲「証拠固めの見る」である。トマスは信じえんがために「証拠固め」に走ったが、突如それが挫かれて、いまや「証拠固め」なしで信じるに至ったのであった。このトマスへの祝福が語られている。

（トマスにおいて、「証拠固め」のエイドーは「礼拝」のエイドーへと転倒され、こうして上記対照表のレトリック構造は、「見る」ことのモチーフを強力に貫き通したのである。）

上掲右枠のテキストはその顕文（表面）を見る限り、トマスはまさに「証拠固め」を完遂したように見える。しかし陰密裏ではトマスは深い処罰を受けかつその場で許されたのである。トマスがひれ伏し絶叫しつつ告白したのは、眼前で働いたこの奥深い裁きと赦しの愛の現前を礼拝して、であったのである。そのことの具体的な経過をわれわれは拙論『わき腹』にて呈示したつもりである。

## 2.12 /ホラオー/の未来形と現在完了形

### 2.12.1 ヨハネ「福音書」の時間論と術語ホラオーの用法

上記対照表の左枠最下段の「あなたがたは見ることになる（ホラオーの未来形）」と右枠最上段の「わたしたちは見た（ホラオーの現在完了形）」は、緊密なレトリック構造内部の響き合いとして、意識的に対応させてある。

1.1.72（追記）に述べておいた、ホラオーの未来形および現在完了形の用法のプロトタイプを思い出されたい（しばらくは、ホラオーの「見る」は、四角で囲んだ「見る」で表記する）。告別説教の言語空間のなかで（さえ）「ホラオーの未来形」は、地上のイエス



が去られた夜の悲しみの中でそれでもなお希望して待つ者が、かの時にイエスを「見」／イエスとその者たちを「見られる」、というのがそのスキーマであった。その意味では、この「見る」ことの希望は「福音書の外」へ向かっていた。

そしてまたこの希望は、冒頭章末尾で、読者がこの書物を読み進める中で（読み方に成功すれば）経験するだろうことへの希望として、次のように語られてもいた。つまりこの「見る」ことの希望はここでは、「福音書の中」にも見出す可能性もありうるものともされているのである。

<sup>1:10</sup> イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。

もっと偉大なことをあなたは「見る」ことになる。」

<sup>1:18</sup> 更に言われた。「はっきり言うておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、

あなたがたは「見る」ことになる。」

「福音書」冒頭章末尾に、他ならぬイエス自身が予告し約束された「君たちは「見る」であろう」という言葉（ホラオーの未来形）があった。そしてこのことを承けて最終章で、イエスの言葉が＜真実であったのだ＞ということを証するものとして、「わたしは「見た」」という喜ばしい知らせ（まさにあのホラオーの現在完了形）を共同体にもたらした者がいる。マグダラのマリアである。そしてまた、顕現されたイエスが「主を見て（エイドーして）喜んだ」弟子たちに向かって「聖霊を受けなさい」と言って、「息を吹きかけられた」あの瞬間に、彼らは共同体の証の言葉をその口に得たのである：「ヘオーラカメン・トン・キュリオン、われわれは主を「見た」」

<sup>20:18</sup> マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を「見ました」」と告げ、

<sup>20:18</sup> ἔρχεται Μαριάμ ἡ Μαγδαληνὴ ἀγγέλλουσα τοῖς μαθηταῖς ὅτι ἑώρακα τὸν κύριον,

<sup>20:25</sup> そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を「見た」」と言うと、

<sup>20:25</sup> ἔλεγον οὖν αὐτῷ οἱ ἄλλοι μαθηταί, ἑώρακαμεν τὸν κύριον.

現在完了形ヘオーラカの考察にとり、上掲引用文中に証言を提示する言葉（「と告げ」、「と言う」）が存在していることは極めて重要なのである。ヨハネ「福音書」の時間論を反映して現在完了形ヘオーラカはプロトタイプが二重化していて、その一方が、「キリスト＝復活のイエスを見た」と証言する」というものだからである。そしてある意味では奇妙ではあるが、それでも大貫全時論が指摘する「非論理」からみればまた納得できもすることとして、このヨハネ共同体の証の言葉が（つまりヘオーラカのこのスキーマが）、洗礼者ヨハネとイエスとの二重の源泉を持つという事実がある。（下の3.11の単数複数の交替、19.35の目撃者＝愛弟子は、ヘオーラカという証言が、他ならぬヨハネ共同体のものであることを如実に示している）

<sup>1:34</sup> わたしはそれを「見た」。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」

<sup>3:11</sup> はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、「見た」ことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。

<sup>3:32</sup> この方は、「見た」こと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。

<sup>8:38</sup> わたしは父のもとで「見た」ことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。」

<sup>19:35</sup> それを「目撃した者」が証しており、その証しは真実である。その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている。

ここでは「わたしは見た」と言う、「わたしたちは見た」と言う、という形式に見られるごとく、見たことと、そこから榮現する言語行為とは連続しているのである。まず見て、つぎにそれを根拠にしてやおら信じる、このように二段のステップを踏むということ極めて例外的なことであることを確認しておきたい。

ここでもう一度、セオレオーの否定形現在とホラオーの肯定形未来とが結合している 16.16.17.19 の内容に帰ってみよう。あの場面でのホラオーの肯定形未来は希望の未来のメンタルスペース M を「福音書の外」に設定していた。希望の実現はホラオーの現在完了形で告げられるだろうが、その場所は「福音書の外」であるはずであった。しかしそれにもかかわらずわれわれは、ホラオー現在完了形を「福音書の中」、本文最終章のイエス顕現物語のなかに読む。そのみならず冒頭章の洗礼者ヨハネ証言物語の中にさえそれを読むのである。拙論『わき腹』で驚きをもって呈示したごとく、ヨハネ「福音書」の冒頭章にはルカ福音書の極めて精密でダイナミックなデフォルメが書き込まれているのであった。ヨハネ「福音書」の円環的時間論を術語ホラオーは鮮明に告げているのである。そしてヨハネ「福音書」の弟子物語は全く新しい羊皮紙には書かれえない。福音書文学の最終章イエス顕現物語が書き込まれた跡が幽かに読み取れる古い羊皮紙に「福音書」の冒頭章が書かれてこそ、時間の円環性が如実に立ち上がってくるのである。

## 2.122 シニフィアン/ホラオー／の超スキーマ

能・狂言では主人公の語りを聞けば、われわれは驚異的な隔たりの時間空間の場面移行を即座に経験することができる。その感覚を持って下の一連のバロールを聞いてみよう。個々のバロールにはいずれも、ホラオーの現在完了形ヘオーラカ「見た」を含んでいる。ゆっくり読むならば、朝まだきの曙がりから曙光を迎えるまでの過程とも喩えるべき、場面移行の神学的過程が、テキスト読み取り空間の中に生き生きと聞き取れるであろう。

1: 18 いまだかつて、神を「見た者」はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

5: 37 また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。

あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を「見た」こともない。

6: 46 父を「見た者」は一人もない。神のもとから来た者だけが父を「見た」のである。

9: 38 わたしは父のもとで「見た」ことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。」

14: 7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知るようになる。今から、あなたがたは父を知る。

いや、既に父を「見ている」。

14: 9 イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか。

わたしを「見た者」は、父を「見た」のだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。

まことに鮮やかなカーブを描く物語推移である。14.7 がその転換点となっている。

われわれはヨハネ共同体の作詩作業を垣間見ているのであろう。近代的自我のなす作業チャートではなく、神の光が徐々に下り、谷間が明るむまでを書き留める作業である。この幻は聖霊の降下とも見える。太古的感情を喚起するようなバロールのつながりをよく読めば、地上のイエスの時で何かが進行するとされているのかわかるような気がする。

イエスは地上に「一緒に」おられる間に、人々を新しく生まれ直させ、そのことによって「神を「見る」眼」を与えて下さるのである。

この物語推移を読めば、根幹モチーフは「神を「見る」」であり、「イエスを「見る」」はこれに仕えていることが知られよう。

神を「見る」眼を賜った者のみがイエスをその本来の権威において「見る」ことができるのである。

神を「見る」眼を賜った者へと転ぜられた者が「見る」、ということが／ヘオーラカ／の超スキーマである。

しかし「神を見る眼」とは比喩表現である。神から見られることによって始めて神を見、神を見ることによって光を体内化し、光に抱え包まれる、そのような対象関係を表意するものとして、われわれはこの比喩を用いるのである。

『ある奇跡物語の転倒』というタイトルでわれわれの呈示した 9 章奇跡物語はまさに「新しく上から産み直された者が、世の光を見る眼とイエスを証する言葉とを賜った物語」という同位体を含んでいるのであった。ここでは視覚動詞 / βλέπω / について「スキーマの上昇」が遂行されている。共観福音書では眼疾の癒やしによって回復された肉体的視能というスキーマを指して βλέπω が使用されているが、ヨハネ「福音書」9 章はそれを表意するときは必ず / ὁρᾶν βλέπω / (4回、すべてアオリスト、他の章には出現

しない)を使用し、／βλεπω／(8回、すべて現在)は「世の光を見る」というスキーマに上昇しているのである(11,9がこのことを「事後的に」確認する、という構造になっている)。

さて、／ヘオーラカ／の上記超スキーマがどれほど厳格に規定されているかは、／セオーレオー／の超スキーマを最高に上昇させた拡張事例とこれを対照するとき、あらためてその意図の強固さが知れるのである。

- 14:9 イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。  
(A) わたしを見た者は、父を見たのだ。  
ὁ ἑωρακὼς ἐμὲ ἑώρακεν τὸν πατέρα:  
なぜ、『わたしたちに御父をお示ください』と言うのか。

- 12:44 イエスは叫んで、こう言われた。  
「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方を信じるのである。  
(B) 2:45 わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。  
12:45 καὶ ὁ θεωρῶν ἐμὲ θεωρεῖ τὸν πέμψαντά με.  
12:46 わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、わたしは光として世に來た。

(A)は 神を見る眼を賜った者がはじめて、「神のかたちにおいてイエスを見る」ことが可能であることを告げているのであった。これに対し(B)は、「地上から遠ざかる」道を歩む定めにあるイエスを見るとき、この道を透かしてその向こうに宗教的畏怖のうちに、この方を遣わされた方を予感し窺うのである。セオーレオーの超スキーマは「(見えなくなっていく)イエスを悲しみのうちに見る」だからである。この意味で(B)は「イエスのかたちにおいて神を見る」と言えよう。

セオーレオーはこのように<イエスを通して神へ>、従って地上から天上へという方向性を持つが、12,44で、「信じる」という営為がこれと平行して語られていることに注目しておきたい。そこにはヨハネ共同体の「信じる」ことの方角線がはっきりと現れているからである。

ゾーエをめぐるバロールで、／ホラオー／と／セオーレオー／が使用されている例が、それぞれひとつずつ、存在している。これの考察は割愛して、対比のために使用例だけを挙げておく(14,19はこの語法を踏まえた言語遊戯である)。

- 3: 36 御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがない  
(=命を見ない) οὐκ ὀφείλει ζῶντι) ばかりか、神の怒りがその上にとどまる。]

- 8:51 はっきり言うておく。わたしの言葉を守るなら、  
その人は決して死ぬことがない (=永遠に死を見ることがない θάνατον οὐ μὴ θεωρήσῃ εἰς τὸν αἰῶνα)。

- 14:19 しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、  
あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。  
[わたしを、つまりわたしが生きていることを見る] ὑμεῖς δὲ θεωρεῖτε με, ὅτι ἐγὼ ζῶ καὶ ὑμεῖς ζήσετε.

以上のようにホラオー、特にヘオーラカが、神を見る眼をもって地上を見るという、「福音書」にのっての基幹的スキーマをそなえているとき、「わたしを見る」という言葉をもってイエスが語られたごくわずかの貴重なバロール例(全3例)のうちのどれかが、日常言語次元にそのスキーマを降下させているとは考えられないことである。

- 6:36 しかし、前にも言ったように、  
あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。ἑωράκατέ [με] καὶ οὐ πιστεύετε.

- 14:9 イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。  
わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示ください』と言うのか。

20:29 イエスはトマスに言われた。「わたしを<sup>見</sup>たから信じたのか”Οτι ἑώρακάς με πεπίστευκας。見ないのに信じる人は、幸いである。」

本来「見た」は「信じる」と結合する隙間を持たない。6,36は地上の頑なさである。これに對比して20,29は「見た」の十全な成就を示す。今やトマスが信仰の証拠固めとして「見る」ことを挫かれて、「神を見る眼でわたしイエスを「見る」」のこの「見る」を完成させたことを、イエスは祝福されているのに違いない。これは慨嘆ではなく感嘆賞賛のパロールである。

## 22 証の言葉 ヘオーラカメン の感性的根拠としての エイドー

### 2.2.1 イエス顕現物語における エイダー と ヘオーラカ

以下、紙幅の都合にてメモ的に記述する（拙論『エイドー』の要約も含む）。術語エイドーはアミカケでエイドーと表示する

20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。  
20:20 そこへ、イエスが来て真真中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。  
20:21 そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。  
20:22 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。  
20:23 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うのと、トマスは言った。

明らかにエイドーと **ヘオーラカ** は一組のものである。このことが屈折して述べられているのがマグダラのマリアの例である。

20:11 マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかかめて墓の中を見ると「墓の中へと向かってかがみ込んだ」、  
20:12 イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。  
一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。  
20:13 天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。  
「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」  
20:14 こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。  
しかし、それがイエスだとは分からなかった。  
20:16 イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。  
「先生」という意味である。20:17 イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなきい。  
まだ父のもとへ上っていないのだから【節残余削除】。  
20:18 マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、  
「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。（「見る」の原語はセオーレオー）

マリアには「イエスの立っておられるのが見えた（セオーレオー）」のではあるが、イエス喪失の心理的距離感があまりにも強くイエスを視認し得なかったのである。つぎに「マリア」との声掛けを聞いて「振り向き」、「ラボニ」と応えてイエスに「すがりついた」のは、「エイドーの喜び」（上掲20,20）が爆発したことの表現。この表現を通じてエイドーの実現したことが間接に示され（エイドーそのものが「対象と一体化したことの喜び」を内包する）、このエイドーが「わたしは主を見ました」へ接続している。

2.2.2 洗礼者ヨハネの証言物語における **エイドー** と **ヘオーラカ**

<sup>1:32</sup> そしてヨハネは証した。「わたしは、『霊』が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た *τεθεωμαι*。  
<sup>1:33</sup> わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『霊』が降  
 って、ある人にとどまるのを見た。その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。  
<sup>1:34</sup> わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。』<sup>1:35</sup> その翌日、また、ヨハネは二人  
 の弟子と一緒にいた。<sup>1:36</sup> そして、歩いておられるイエスを見つめて、『見よ、神の小羊だ』と言った。  
<sup>1:37</sup> 二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。

「エイドーした」という自分の根本経験を他人に語り継ぐとき「わたしは見た」と発語するのである。この根本経験から証の発語へ向かう流れはゾーエー的連続体であり、そこに「信じる」という契機が割り込む隙間はない。エイドーしたと自ら語る者はこの対象から（それはホラオーの対象でもあるのだから、神、キリスト＝復活のイエス、である<sup>4</sup>）光を浴び、光に包まれ、ゾーエーを吸入するのである。辞書的には非変化詞として分類される「見よ 'ιδε」は136「見よ、神の小羊だ」<sup>5</sup>では完全に「スキーマの上昇」を受けていて、「エイドーの太い視線を、まさにゾーエーの臍の緒として、この方、神の子羊に固着せよ」との強力な呼びかけである。

## 223 シニフィアン/エイドー／の超スキーマ

<sup>12:20</sup> さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。  
<sup>12:21</sup> 彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。  
<sup>12:22</sup> フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。  
<sup>12:23</sup> イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。」

「エイドーしなさい」との洗礼者ヨハネの呼びかけ136を承けた「二人の弟子」によって、エイドーする視線、ヘオーラかと証す言葉は流れとして開始した137。それは伝播に伝播を続け世界を巡って、遂に「エイドーしたい」というギリシア人の言葉に乗って漂流し来たり1221、これは「二人の弟子」によってイエスのもとに届けられた1223。上掲原文では別々に聞こえる「礼拝するた」と「お目にかかりたい」とは、まさにひとつのことであり、われわれはここに「礼拝のエイドー」というスキーマを見出す。

その超スキーマは次の箇所に具体化されている

<sup>11:32</sup> マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、  
「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。  
<sup>11:33</sup> イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、  
<sup>11:34</sup> 言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください Κύριε, ἔρχου καὶ ἴδε。」と言った。  
<sup>11:35</sup> イエスは涙を流された。

イエスのエイドーとマリアのエイドーが激情的に向かい合っている中で「目と目で」両者が何を語ったのかとか、アンダーライン部分がギリシア語原文では接続しうるように読め、Κύριε, ἔρχου καὶ ἴδε。「主よ、来たりませ、みそなわしませ」と唱える、ヨハネ共同体のマラナ・タの礼拝式が推測できるのではないかと、Κύριε, ἔρχου καὶ ἴδε が一章でそのまま、あるいは種々のヴァリエーションのもとに、意識的に反復されていること、またこの定型句についてのピラベックなどによる情報（それによってここには特記すべき「スキーマの上昇」が敢行されていることになる）等々については、拙論『エイドー』を参照されたい。

## 224 シニフィアン/エイドー／のスキーマの諸次元

Cont. 1

<sup>5:6</sup> イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病氣であるのを知って、  
「良くなりたいか」と言われた。  
<sup>9:1</sup> さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。  
<sup>11:33</sup> イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、  
<sup>11:34</sup> 言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。

Cont. 2

<sup>19:26</sup> イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。  
<sup>19:27</sup> それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」

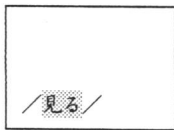
Cont. 3

1: 39 イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。  
6:22 その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。  
6:24 群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来了。  
19:33 イエスのところに来てみると、既に死んでおられたので「そのことを見て」、その足は折らなかった。

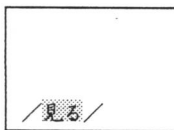
Cont. 4

4:48 イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見ない ἴδτε ければ、決して信じない」と言われた。  
6:30 そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見て ἴδωμεν あなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいませ。  
20:25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見 ἴδω、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」  
20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見ない ἴδε。  
また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」  
20:29 イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ない ἰδούτε 者に信じる人は、幸いである。」

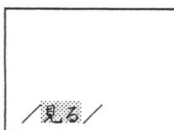
Cont.1



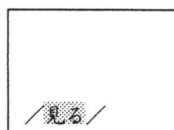
Cont.1



Cont.1



Cont.1



スキーマ [見る]

(Cont. 1) = 「生命を恵む視線のスキーマ」。ゾーエーに関する三大奇跡のいずれにもイエスの「生命を恵む視線」が、必ず先行的に、注がれる。11,34 は「あなたの視線を注いでやって下さい」。

11:32 マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、

主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。

この箇所では「もしここにいて下さって、あなたの視線を浴びていたなら」とも読める。

(Cont. 2) = 「命名する視線のスキーマ」。命名は共同体の掟の体系のうちに、個人を上から新しく植えていく行為と考えられる。「生命を恵む」というプロトタイプの拡張としての「命名する」。ペテロ命名にあってもイエスは強い視線(この場合は ἐμβλεπω の視線)を投げかけられた。

(Cont. 3) = 「(生命の毒である) 疑いを晴らす視線のスキーマ」。見て回る、見に行く、という移動動詞と結合されていることから、土地握取、山野の予祝を表意する旧約聖書の「見る rā'āh」<sup>6</sup>から分岐した支流に位置しているスキーマであると考えられる。「生命を恵む」視線を見る視線という事例の拡張事例であろう。下は「疑いを晴らす」の拡張。

(Cont. 4) = 「(信仰の) 証拠固めを求める視線のスキーマ」。イエスのパロールを除く三例はすべて第2アオリスト、接続法で使用されている。生命に与る手段として信仰を理解する者たちは、信じて役に立つという証拠をまず要求する。「しるしをエイドーする」というときの「見る」は、この意味での「証拠固めのエイドー」である。

## 23 「見ずして信じる信仰」という定式に含まれている誤解

### 23.1 トマス物語末尾の私訳とパラフレーズ

私訳 20,29 イエスはトマスに言われた。神のかたちにおいてわたしを見て、君も信じることになったか、見て確かめず、それでいて信じる人は幸せた。

パラフレーズ 20,29 イエスはトマスに言われた。

神と人間との間の言葉としては、ホラオーするとは何を見ることか。それは本来、神を見ることである。

わたしを見たときで言うこと、それは、神のかたちにおいてわたしを見たときと告白することである。

わたしを見たときで言うことは何を根拠にして可能になるのか。

それはわたしを礼拝においてエイドーしたときに、であり、そのときに限られる。

トマスよ、君は礼拝でわたしを前にしていながら、いやむしろわたしを前にしていることが知られたから

わたしを殺そうと、無意識に君の手をわたしのわき腹に突き刺そうとした、そして実際そうしてしまった。

彼らは突き刺してしまった方をホラオーするであろう（ホラオー未来形）、と書かれていたとおりに1937。

まさに君はわたしを突き刺し、そして書かれている通りにわたしをホラオーしてしまった（ホラオー現在完了形）。

そのとき君がわたしを神のかたちにおいてホラオーしたのは、君が殺してもわたしが死ななかったからだ。

つまり、わたしが生きているのを確かめエイドーした君は驚き恐れて直ちに、自分の脚を折り砕き、

わたしの前にビブトーして（身を叩きつぶすように平伏して）わたしを〔礼拝において〕エイドーしたからである。

あのときわたしは既に死んでいるのをエイドーしたあの者は、わたしの脚を折り砕かず立ち去ったのだが1933。

こうしてトマスよ、君は信じ得るための証拠が欲しくてエイドーしようとしたが、経験したのは神殺害の大罪と裁きと赦しであり、その結果としてわたしの前にビブトーしエイドーした。それは見て確かめるというエイドーでは全くない。見て確かめる者の前に神は現前しない。見て確かめる道を砕かれたトマスよ、君は幸せだ。

この箇所は手前の同位体では、つまり表の文、顕文では、見て確かめるエイドーをトマスは確かに完遂したのである。それを欲求するのがトマスのあるがままの姿だから、彼がそうすることをイエスは、自らの心の痛みに耐えて、許されたのである。しかも「信じない者でなく信じる者になりなさい」という言葉で抱きかかえながら。しかし読者はイエスのこのような抱きかかえを前にして心の底に動くものを感じ、問わざるをえないだろう、「イエスはどのように、子どもの言葉を母親がそのままぞって反復するのに似た、こんな言い方をされるのだろうか」。この問いで<トビック>が生じ始め、奥にある同位体、つまり彰隠密への通路が拓かれる。釘跡に手を当てるのなら「見て確かめる」行為の範囲内である。トマスが「釘跡に指を入れる」と語る時、テキストは別の次元に移行したのである。「この手をわき腹に入れる」と口走るその言葉の勢いには、「見て確かめる」という表の意識から強く仕切り離されている、ある強烈なエネルギーが噴出している。イエスのわき腹めかけてトマスがその腕を勢いよく突き出す、この無意識の身体行為は、ヨハネ共同体の始元に隠された神殺害の行為の反復なのである。これはわれわれの推測ではない。表に意識されたトマスの行為と、裏で無意識にこみ上げてくる彼の行動を、「横から」両方とも明瞭に見て取っている冷徹な視線を、ヨハネ「福音書」はその19章に書き込んでいるのである。「それを目撃した者、ホ・ヘオーラコース」1935の目がそれである（拙論『わき腹』）。

## 2.3.2 トマス物語における「無意識」の次元

<sup>20:25</sup> そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。

「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、

また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

拙論『ある奇跡物語の転倒』、『悪魔のλαλῶν／イエスのλαλῶν』にてクリステヴァのテキスト理論、ラカンの言語理論に示唆を受けながら、われわれは9-10章テキストの中にはほとんど言語以前の無意識に近い層からの異様なリズムを持つ何種類ものパロールに遭遇した。ここに出現した強力な神学世界の輝かしさからみると、福音書本文の終結部をなすトマス物語は余りにも貧弱にしか読めなかった。無意識次元からの言語の発生ということに焦点を当てながら、精神分析学の初歩的な学びを進めつつトマス物語の分析

に取りかかったのが、拙論『こう言って彼は手とわき腹をお見せになった』である。われわれなりに発見に次ぐ発見で多くの前進が得られたとは思いますが、最後に舞い戻ったのが上記バロールの精神分析的解釈を深化させるという課題である。

転移のもとでのアクティングアウト、対象への依存とサディズムの攻撃とのメラニー・クラインのアンビヴァレンスの爆発（子宮回帰を含めたそれ）、「～しないならば、～しないならば、～しないならば、わたしは信じない」という強力な言語形式の中に噴出している、フロイトのいわゆる Verneinung。主にこの三点から切り込もうとするわれわれの微力な分析は、本小論記載以上の詳論については、拙論『わき腹』を参照願うしかない。本小論で上記バロールに関し新しく開拓しようとしていることは、対象関係論のなかで「対象が生き残ることの、主体の対象関係的行動にとっての重大な意義への注目」に学ぼうとする、という課題である。

## 関連拙論

佐々木寛治：

- 『イエスのエイドーとマリアのエイドー——ヨハネ「福音書」11章28-37節の提示語分析』  
中国短期大学紀要 第29号 1998 (=エイドー)
- 『ある奇跡物語の転倒 ——ヨハネ「福音書」9-10章における術語ラレイン [III-1] ——』  
中国短期大学 紀要 第30号 1999 (=転倒)
- 『テキスト重層性についてのレジュメ "Doubling"-Topic-Isotopie —新しいテキスト記号論 = Semegesis に向けて—』  
日本新約聖書学会第39回大会口頭発表付属論文 1999 (=重層)
- 『悪魔のλαλεωとイエスのλαλεω——ヨハネ「福音書」9-10章における術語λαλεω [III-2a] ——』  
川崎医学会誌一般教養篇第25号 1999 (=悪魔)
- 『ヨハネ「福音書」のレトリック構造について——術語λαλεω 探求の途上にて』  
ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究会口頭発表提出論文 1999 (=レトリック)
- 『こう言って彼は手とわき腹をお見せになった ——ヨハネ「福音書」20,19-29研究——』  
中国短期大学 紀要 第31号 2000 (=わき腹)
- 『ヨハネ「福音書」「絶望の道」段落8,31-47に孕まれた言語＝律法理論——その解明の途上から』  
関西新約聖書学会第41回大会口頭発表提出論文 2000 (=律法)
- 『言語生成論の観点よりヨハネ8,31-47をガラテヤ書と対照する』  
日本新約聖書学会第40回大会口頭発表提出論文 2000 (=ガラテヤ)
- 『イエスを呼び求める者、イエスを証する者、イエスを殺す者 —— それぞれの者たちの言語の生成』  
ヘーゲル研究会（岩波哲男・加藤尚武世話人）第43回研究発表会口頭発表提出論文 2000 (=諸種言語)
- 『ビスティスを聞く／ラレオーを聞く』  
川崎医学会誌一般教養篇第26号 2000 (=ビスティス)
- 『R・ブルトマンはどこへ向けて「聞く」のか』  
川崎医学会誌一般教養篇第26号 2000 (=どこへ)

<sup>1</sup> 『物語における読者』（イタリア語原本からの邦訳）では「シナリオ」となっており、英語原本 The Role of the Reader, 『テキストの概念』、『記号論と言語哲学』では「フレーム」となっている。認知言語学のフレーム知識論の前史が反映していて興味深い。ここにはエーコフの、辞書論から百科辞典論への転出、コード論の過剰コード論への飛躍的拡充の格闘が示されているが、これらは客観主義的定義論が温存された上での努力である以上は、われわれはこの格闘に依存することはできない。術語フレームの使用についてはわれわれは、混乱を避けるために、認知言語学の文脈の中でのみこれを限局することにする。

<sup>2</sup> Topos という基底を意識して topic と isotopie とを結び合わせて考察し、それぞれ語用論的意味論と意味論的意味論に割り振ったのはエーコフである。グレマスの isotopie の発想をイエリムスレウたちの研究からも得ている。

<sup>3</sup> しるしを「見る」という語法はヨハネ「福音書」には対照的な二通りの方法があるが（ヨハネの鏡！）、「しるしをセオーレオーする」という語法は肯定的な極に立つ。宗教的畏怖の距離感を透かして、「知りえなさ」をなお明らめようとする営為がこれである。他方、後述するように、「しるしをエイドーする」は信じえんがために「証拠固め」が欲しくて「見る」のであり、否定極であり、前者のバロディである。

<sup>4</sup> 旧約聖書が「神を見る rā'ah」と語る極めて重要な箇所である出24,11の70人訳はエイドーである（対象を「場所」と改変した上のことである）。

<sup>5</sup> ヨハネ共同体の証言の流れの始元をなすこの重大バロールに対し、下記バロールはそのバロディである。

<sup>19:14</sup> それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった。ピラトがユダヤ人たちに、  
「見よ、あなたたちの王だ」と言うこと、

<sup>6</sup> 並木浩一「視覚表現における古代的特色——ホメロス・ウガリト文学・旧約聖書」（同氏著『旧約聖書における社会と人間——古代イスラエルと東地中海世界——』教文館1982）所収 235-237 ヨハネ「福音書」のエイドーは旧約聖書の rā'ah と多くの面で重なっていることにわれわれは驚いている。知覚動詞分析の古典であるこの論文には、今回も再読して多くを学ばせていただいた。記して感謝の意を表したい。